Le sacre de Louis XV, roy de France & de Navarre, dans l'église de Reims, le dimanche XXV octobre 1722.

[Paris], [18-?]. 1vol. 39 plates (copper mono.). 72×52cm. 〈K288. 493-S〉文献番号 2-29

Hiler p. 216, 770

『フランスならびにナヴァラの王であるルイ 15 世の聖別式；1722 年 10 月 25 日日曜日ランス大聖堂にて』

1715 年に 5 歳で王位を継いだルイ 15 世が，ランスの大聖堂で行われた聖別式（戴冠式）に臨んだ様子を現したインフォリオ判の大作である。39 枚のプレートと 32 枚の文書で構成されており，プレートは聖別式の次第を描いた 2 頁にわたる銅版画が 9 枚と，参列者のコスチュームを描いた銅版画が 30 枚になる。全体の画面構成と人物像は画家デュラン Pierre Dulin（1669-1748）とペロ Pierre Josse Perrot（活動期 1724-35）によるもので，版画は当時の大家であるコシャン C. Nicolas Cochin，ド・ラルムサン de Larmessin，デュシャンジュ Duchange，タルデュ Tardieu らが制作している。

式次第は国王の起床式 Le lever du Roy から始まり，ランス大聖堂へ向かう行列・大聖堂における宗教儀式（聖アムプール登場，祭壇にひざまずく国王，塗油式）・戴冠式・王座につく国王・奉納式・祝宴と続き，一連の儀式の場面と重臣らに囲まれた国王の姿が再現されている。タピストリーが飾られ列席者で埋まった大聖堂の物々しさ，内陣で展開される儀式の厳かさ，そして国王を囲む聖職者や大貴族や側近たちの誇らしげな姿に目が引かれる。式の内容は文書で解説されており，各場面に登場する人物の官位や名称も明記されている。

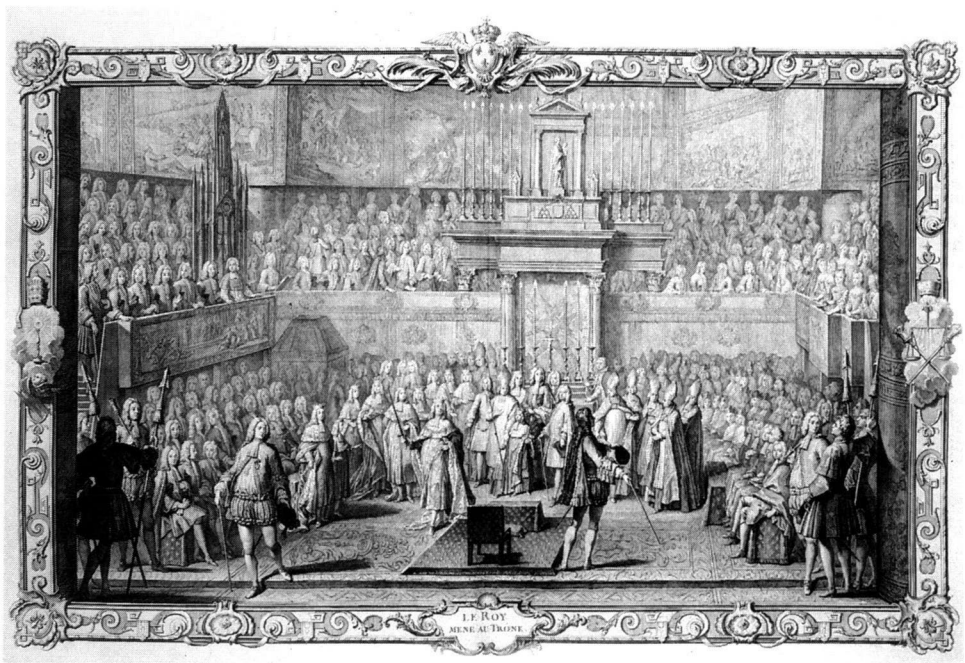
儀式場面もさることながら，正装した参列者を一人ずつ克明に描いた 30 枚のプレートは圧巻である。聖職者・大貴族・重臣・側近・衛兵などがそれぞれ見事な衣装を身につけて当日の儀式に臨んでおり，彼らが重要な役割を果たしていたことがよくわかる。プレートに添えられたキャプションには衣装の細部の説明があり，織物や装飾の材料まで理解できるようになっている。

国王は三種類の衣装を着て登場する。起床式には銀のローブを着用し羽根飾りの付いた黒ベルベットのトーク帽をかぶり，塗油式にはローブを脱いで下に着ていた真紅のサテンのローブ姿に無帽，戴冠式には紫ベルベット地に金の百合紋を刺繍した大マントをチュニックとダルマティカの上に羽織ってシャルルマーニュ冠を頭に戴き，右手に王杖左手に裁きの杖を持つ。摂政オルレアン公をはじめ，コネタブル（元帥），侍従頭，王室侍従らの大貴族は金地のローブにアーミン毛裏の紫の大マントを着け，常に国王の傍らにいる。金地に織り出された模様はまさに 18 世紀初期の様式であり，これほど克明に細部が描かれた図像資料は珍しい。当時の通常服であるアビに小マントをはおって控えるのは，国王養育

係，国王の裾引き役アレグル侯，主馬頭で，いずれも金地に花文の揃いである。なかでもシャルルマーニュ冠を運ぶマレシャル（副元帥）のアビとマントにはスペイン製金レースが縫いつけられており華やかである。

華やかと言えば一昔前の衣装を着けた儀典長が人目を引く。銀レースと銀リボンで飾ったプルポワンにショース，黒レースと銀レースの付いた黒マント，白絹靴下に銀の靴下留め，銀の花飾り付き銀靴という装いで指揮棒を振りかざす。16・17世紀の宮廷衣装を取り入れて儀礼服にしたこの衣装は，スイス百人隊や王室守衛や奉納物を携えた騎士らも着ており，歴史的な由来を物語っていると同時に式典に花を添えている。護衛兵には胸鎧を着けたスコットランド六人隊もいる。

18世紀の儀礼服についてこれほど詳細に描写され解説された資料はまれである。図像資料は時に文書資料からの推測を簡単に覆してしまうことがある。服装史研究に豊かな示唆を与える好資料である。（辻）



王座につく国王